



ユネスコ関係者が綾町を訪問



秋になってから視察・実習の受け入れ件数が増えています。11月1日〜2日には、ユネスコに関わる専門家が綾町を訪れました。日本ユネスコ国内委員会のMAB分科会委員で、国内のユネスコエコパークを支援されているMAB計画支援委員会委員長でもある、横浜国立大学・松田裕之教授の紹介で行われたものです。

来町されたのは、ユネスコ本部の元ユネスコ生態部長クリュスナーIIゴット・ミゲルさん。それから、来日中だったアフリカ・マラウイMAB国内委員長やマラウイ国自然公園野生動物ディレクター、鳥取大学地域学部の先生も同行されました。通訳は、綾町と包括連携協定を結んでいる宮崎国際大学のウォーカー・ロイド副学長が務められました。

一行は初日、ユネスコエコパークセンターや手づくりほんものセンター、照葉大吊橋、イオンの森を見学。ユネスコエコパーク推進室

ユネスコエコパークセンターを見学した訪問団



は、綾町のこれまでの取り組みなどを紹介しました。翌日は、綾ナチュラルガーデンの見学からスタート。早川農苑で農業体験をし、綾城と酒泉の杜の見学を行いました。

参加者からは、綾町には世界各国のユネスコエコパークにとって参考になるよい事例が多いとの声が寄せられました。一方で、看板や

ウェブサイトで多言語による情報掲載など、海外向けの対応をもう少し充実させた方がよいという助言もありました。さらに、すべてのユネスコエコパークにおいて、自然保護をベースにした経済活動が課題になっているとの指摘も出されました。

意見交換の場では、森林の保護・利活用の方策の国による違いも浮き彫りになりました。日本では、ゾーニングや行政・民間との調整次第でスムーズに進められることがあります。アフリカなどでは、生活に困った住民が薪炭材として木材を切り出すことが多く、森林保護に関する調整が難しいといっ



綾城など町内各地を視察

た課題が生じているとのことでした。互いにとって新鮮な情報共有ができた有意義な時間となりました。さて、来年の7月ごろに綾ユネスコエコパーク10年間の報告の審査結果が分かる予定になっています。新しい10年が始まるのです。コロナ禍が落ち着いてくれば、さらに多くの視察・実習の受け入れが見込まれます。世界のユネスコエコパーク関係者などから注目されている、私たちのふるさと・綾町。ユネスコエコパーク推進室は、環境保全とともに社会・経済活動にも踏み込んでいく新しい取り組みを行っていきたくと考えています。



早川農苑での農業体験

MABとは
Man and the Biosphereの頭文字をとった用語で「人と自然との共生」を意味します。

綾ユネスコエコパーク推進室・綾ユネスコエコパークセンター

☎77-3482 URL <https://ayabrcenter.jp> ※エコパークセンターは毎週日・月曜日および祝日休館
感染症の影響による休館などの情報はホームページで随時更新します

column

ミズカマキリ

陸上で見られるカマキリの仲間とは全く別の生き物で、ため池や小川などの水中で暮らすカメムシの仲間です。

カマキリのような大きなカマを水平に構え、エサとなるアメンボなどの小さな昆虫を待ち構えます。細長い特徴的な体型をしており、おしりから出た長い尻尾のような管は、水面に突き出して空気呼吸をするのに役立っているようです。

通常は水中にいますが、土の中で産卵するため水と陸の境を主な生活の場としています。確認されることはまれなのですが、冬は水中の深い所で集団で越冬すると言われています。その様子を見てみたいものです。



ムラの肖像

昭和21年に開拓が始まった尾立地区。町内の開拓地では最も多い83戸が入植しました。

この写真は、平成8年に行われた開拓50周年を祝う祭りの様子を写した1枚です。住民のほとんどが参加し、朝からにぎわったそう。バラ寿司や酢の物など地元の食材をふんだんに使ったごちそうや歌、踊りを皆で楽しみました。

電気や水道などのライフラインが整っていなかった時代に、力を合わせ地域を盛り上げてきた苦労を振り返り、ねぎらいあつた50周年記念祭の楽しい思い出は、今も尾立地区の人々の胸に残っています。

